

優秀賞

親切送り

北海道 上磯中学校 三年
横山 千妃楼

10月。激しい雨が車の窓ガラスを濡らし、外の景色がぼんやりとにじんで見えた。私は買い物に行くために、祖母の運転する車の中にいた。なんということもなく窓の外を眺めていると、小路の曲がり角に人影が見えた。目を凝らすと、おばあさんが濡れたアスファルトに佇み、雨に打たれていた。(おばあさん、どうしたんだろう)と私が考えると同時に車が止まり、私の祖母は路上のおばあさんのもとへ駆け寄った。

「どうされましたか。」祖母がそうたずねると、おばあさんは一つひとつ思い出すように話し始めた。どうやら、おばあさんが老人ホームから出かけようとしたところに雨に遭い、どうしたらいいか途方に暮れていたようだ。

ただでさえ肌寒い10月に、雨でびしょ濡れになったおばあさんの背中では、小刻みに震えていた。

おばあさんの顔を見ると、眉間にしわを寄せ、苦しそうな表情をしていた。私の祖母が、車で送ると何度言っても首を縦に振らないので、祖母は救急車を呼び、老人ホームへも連絡をした。救急車を待っている間、祖母は車の中にあった毛布や着ていた上着を差し出し、おばあさんの背中をさすってあげていた。

私はこの間、ただただ見ていることしかできなかったけれど、おばあさんの小さな背中を見て、自分の手袋を冷たい小さな手にはめてあげた。目が合うとおばあさんは、「あったかいね」と言ってほほ笑んだ。

搬送後、おばあさんは骨折していたことが判明した。祖母の勇気ある行動が悪化を防いでくれたと、病院の先生が話してくれた。

私は祖母に、どうしておばあさんを助けたのかたずねた。祖母は、ニコニコ笑いながら話してくれた。

「私もね、前に外で倒れてしまったことがあるんだけど、周りの人がたくさん手を貸してくれたんだよ。そうしたら、苦しいとか、心細い気持ちがふと和らいでね、とっても楽になったのよ。『親切送り』って知っているかい？」

「しんせつおくり」。聞き慣れない言葉だったので、私は首を横に振った。その様子を見て祖母は、「親切送り」について教えてくれた。

「『親切送り』っていうのはね、誰かからもらった親切を、またほかの人に渡すっていう意味なの。前に倒れたときに助けてくださった方々にお礼も、お返しもしたいっていう気持ちでいっぱいなんだけど、見ず知らずの方だからそれができなくてね。だから、困っている人を見かけたらすぐに力になろう、『親切送り』をしようって決めているんだよ。」

なるほど、確かに親切にしてくれる相手は見知った相手とは限らない。私もなにげない日常で、見知らぬ相手から親切を受けている。

「親切送り」。とてもいい言葉を祖母から教えてもらった。自分が優しくされたら、ほかの誰かに優しさを送る。すると、親切が広がり、優しい世界が築きあげられていく。「小さな親切」の連鎖が「大きな力」になるのだ。